青葉の山に向かいて

辻　憲男（文学部教授）

横川僧都（よかわのそうず）の妹尼の庵は、比叡山の西坂本の小野にあった。浮舟はそこに身を寄せた。一年前の春、薫大将・匂宮との愛に苦しみ、もののけに取りつかれた。宇治川辺で気を失ったところを、危うく僧都に助けられた。素性を明かさぬまま、懇願して尼になった。初夏の青葉と、やり水のホタルを心の慰めにした。

執心深い薫は僧都からこの女の消息を聞いた。“浮舟は生きていたのだ”。薫の一行は松明（たいまつ）も明々と下山した。「小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて、まぎるることなく、やり水の蛍ばかりを、昔おぼゆる慰めにてながめゐたまへるに」、「例の、はるかに見やらるる谷の軒端より、前駆（さき）心ことに追ひて、いと多う灯したる火ののどかならぬ光を見るとて、尼君たちも端に出で居たり」。翌日、浮舟の弟の小君を使いに立てて庵を訪ねさせた。しかし浮舟は面会を拒み、薫の手紙さえも人違いとして受け取らなかった。浮舟の決心は揺るがない。となれば薫の愛執が消え去ることもないだろう…。

源氏物語五十四帖の最後「夢の浮橋」。この中途半端なような結末に不満を感じた読者もあった。『山路の露』という物語はそうした後人の書いた続編で、薫が浮舟に会い、浮舟が母と再会するというあらすじ。それ以上の進展はない。一説に、世尊寺伊行（せそんじこれゆき）の娘・建礼門院右京大夫の作ではないかという。紫式部より百数十年の後、平家滅亡の悲しみを生きた女性である。こちらはその歌集に、晩秋に小野より奥の大原の庵に建礼門院（徳子）を訪ねた夢語りのような秘話がある。

小野は左京区八瀬。比叡山の横川・黒谷への登山道がある。